

悲劇としての Chaucer の *Troilus*

——その悲劇の構成——

室 田 五 郎

〔I〕はじめに

大ていの読者にとって Chaucer といえば、*Canterbury Tales* の詩人であり、そういう常識は、英語国民にとってもその通りであることは、Kittredge の言葉でもわかるのである。Matthew Arnold が Chaucer の詩に “high seriousness” が欠けていると酷評したのは、以上のような常識があまりに強いせいであろう。Coghill は、それは Arnold が *Troilus and Criseyde* を全然読んだことがなかったからだと言っている⁽¹⁾。

私は、この *Troilus and Criseyde* の中に、*Canterbury Tales* とは違った、詩人のいきいきとした自信を感じるのである。この詩の中には、Arnold が見落した “high seriousness” をまさに読むことができる。この詩が Kittredge の言うように、英語でかかれた最も美しく長い物語詩の一つであるばかりか、現代的な意味で、世界で書かれた初めての小説であり、心理小説で、ユーモアもペイソスも、情熱も人間性もある詩である、ということが本当ならば、英文学の中で、この詩が特別な位置を与えられていることになる。少くとも英語で書かれた初めての悲劇詩であるということだけでも、この詩は注目に値すると信ずる。

Chaucer は、最初から愛を語った詩人として現れ、*Canterbury Tales* のあのすばらしい傑作を書く前に、*Troilus* の詩の中に、愛の全てを語り尽そうと全力を注いだかのように思われる。Chaucer 自身、この詩の野心が大きいことを、この詩の終り近くに述べ、この詩がヨ一

ロッパ文学の大きな流れに加わったと自負し、誇りに思うことを、控え目ながら表白しているのである (*Troilus* V 1786—92)。

Troilus は、Chaucer がイタリアに旅行し、最高の表現力を獲得し、その結果として得た大きな収穫であると言われる⁽²⁾。そういうことを考えながら、この作品を読む時、あらためて、いかに Chaucer がこの作品に情熱を燃やしていたかを知るのである。

〔Ⅱ〕 Book I から Book III まで

Troilus は courtly love をテーマとする詩であることはよく知られている。ここで少し、courtly love についてふれておこう。Courtly love は中世におこなわれていた社会体系であって、それを Gaston Paris という人が courtly love と名づけたのである。それは12世紀に南フランスの troubadours (叙情詩人たち) の間で展開し、西ヨーロッパにひろがり、数世紀にわたって文学のテーマとなったものである。Courtly love はルネッサンスで終らず、今日でさえ、そのある面は現代のロマンスに対する態度の中にまだ残っている。その源をさぐると、ローマの詩人 Ovid が挙げられる。彼は愛をテーマとする作品に、*Ars amatoria*, *Remedia amoris*, *Amores* を書いた。Ovid は理論家ではないが、後代の人たちが、その中に体系づける理論の材料を発見したといわれている⁽³⁾。Ovid は長く読まれた詩人で 12, 3世紀頃には広く読まれていた。

Ovid にみられる love は率直にして官能的なもので、技とルールがあった。誰も妻を愛することができず、他人の妻を愛さなければならず、だから love-affairs は秘密を要した。Ovid の場合、love とは男と女のだまし合いであるが、12, 3 世紀になると、女が男の封建君主であって男は女に忠誠を誓い、或いは Cupid に忠誠を誓うというように変っていった⁽⁴⁾。

はじめから不純なものでありながら、次第にロマンチックなものとなり、lover が love-affair を通じて奉仕を学び、著しく深い経験をもたらし、人格を変える力を与えられるというのが courtly love の特徴である。これが文学上大きなテーマとなった理由はいろいろあるだろうが、Chaucer がとくにこのテーマを用いた理由は主として、それが著しく

深い経験を一人の lover にもたらし、彼の人格を高貴にするという特徴をもっていたからであろう。それ故に *Troilus* の物語が Chaucer のこのような, courtly love に対する態度によって、深められ、生かされ、芸術的に高められるに至ったことは当然であろう。

しかし、このテーマが、詩人の中で考えられ、かつそれが現実に文学作品に受け入れられた社会的な背景はどうであつたろうか。

George Williams によれば「中世の結婚は、とくに上流階級の場合には、現代の結婚の理想ともいえる夫婦相和する姿が、どこかにあったと誤解してはいけない。……明らかに、結婚には、ロマンチックな love が伴わなかったことが、大いにありうる。郷土の話における愛情深い妻は Chaucer の目から見ても、注目に価するケースであるらしい。そして、*Canterbury Tales* の中における他の妻たちの典型とはとてもいえない。……Courtly love という、広くいきわたった体系は、夫と妻が個々に調和したものであると思われていなかった現実をふまえていたのである。即ち、彼等は、財産とか、家族とかの理由で結婚し、子供をもつ為に共生し、下層階級なら共に働きもしたし、商売人なら共に事業のやりくりをしたが、毎日のきまった仕事をする以外に、精神的に互いに交わりがなかった⁽⁵⁾。」

つまり courtly love そのものの成り立ちが、不幸な結婚観の歪みに根ざし、その中における男女の真の人間性を求めている止み難い衝動が courtly love を広く一般に受け入れやすい現象をつくったといえるのではなからうか。とくに宮廷人のような、伝統とか、名誉とかを重んじる世界では、夫婦の結びつきは、かなり不幸なものが予想されるのである。

更にこれに関連して注目すべき事は、G. Williams によると、*Troilus* の love-affair には具体的な実例がモデルとして存在し、Chaucer が実在の人物のアレゴリー (personal allegory) を用いたことはほぼ確かなのである⁽⁶⁾。すなわち、*Troilus* は John of Gaunt を指し、Criseyde は Katharine Swynford を指す。この二人の禁じられた love が、宮廷の Richard II 方の敵意や非難を受けたので、それに対して John of Gaunt を弁護し、詩をもって自分の殿様に忠勤を励んだというのである。

この詩は何度も、宮廷人の前で朗読された。そして朗読されたのは

Book III までの部分だった⁽⁷⁾。Chaucer と John of Gaunt の関係は、あまりにも有名であってここであたらしく述べないが、Chaucer にとって John of Gaunt は尊敬の対象だったことは記憶すべきことである。G. Williams は、詩人 Chaucer を理解する為には、この二人の関係を詩人の立場で見る必要があると言っている。

Chaucer は、以前に Gaunt の為 *The Book of the Duchesse* という詩を書いているが、もし G. Williams の説が正しければ、Chaucer は Gaunt の為 *一度ならず* 詩を書いたことになる。(G. Williams は *Complaint of Mars* も Chaucer が Gaunt の為に書いたとほぼ確信しているから、全部で三度書いたことになるだろう。)とにかく、Chaucer は *Troilus* の詩に、特別な意義と特別な感情を注いだに違いない。そうすれば、この詩は実在人物のアレゴリーとして courtly lover の型通りの love ではなく、そこに Chaucer が生々しい人間の衝動を描き、そしてそれに対する偉大なる肯定をうたい上げたことが理解されるであろう。だから、この詩の目的が *Troilus* と *Criseyde* の間におこる love の発展とその盛り上に主としてあるといわれるゆえんである。Book III までを読む限りこれは本当である。そして朗読されたのもそこまでであった。

〔Ⅲ〕 物語の論理と詩人のジレンマ

Book IV から先はどのように物語が展開するのであろうか。言うまでもなく、この詩は、急展開がなされ、悲劇へと驚進するのである。Chaucer は courtly love をうまく成功に導きその絶頂の歓喜を描き、John of Gaunt に忠勤を示したとしよう。しかし、その後、何故彼は悲劇を描かなければならなかったのであろうか。これはこの詩人の自身に対する問いであったであらう。彼自らジレンマを感じたに違いない。

For which right now myn herte gynneth blede,
And now my penne, alas! with which I write,
Quaketh for drede of that I moste endite.

(その為 *に* 今にも私の心は血を流し始め、私のペンは今、ああそれを使って書くのだが、書かなければならぬことの恐れでふるえているのだ。)

(IV. 12—14)

ここに Chaucer 自身の悩みを知ることができる。

だが Chaucer はこの詩を最初から double sorwe (二重の悲しみ) を描くことを目的としているから、この作者自身の吐息は実に人間味の深いものである。ここには矛盾がある。それ故にかえってここに、我々は詩人自身が人間の本質、運命そのものを深く悲しんでいる姿を見るのである。ここで、中世に於て一番の人生問題であった predestination (予定説) の問題⁽⁸⁾が私の頭にうかぶのは全く皮肉な感じがするのである。

Chaucer が Lollius に従って書いたと言っているこの物語は、実は Boccaccio の *Il Filostrato* に従った物語であることはよく知られている。しかもこの話自体は、当時よく知られた古い物語の一つであった。故に、この物語を悲劇に終らせるのは、もはや彼の意志によらず、あらかじめきめられていたのである。

Predestination はただ神学的な問題や哲学上の問題であるばかりか、Chaucer 自身の上に、この物語を通して半ば実験的な経験を与えている。実際 Troilus という人物を悲劇化することに大きな抵抗があったばかりか、Criseyde なる相手の女性を不誠実な人格へと追いやることに一そう抵抗を詩人は感じたのではないだろうか。

For how Criseyde Troilus forsook

Or at the leeste, how that she was unkynde,

Moot hennesforth ben matere of my book,

As writen folk thourgh which it is in mynde.

(如何にして Criseyde が Troilus をすて、或いは少くとも如何に彼女がつれなくなったかということが、これから私の本の内容でなければならない。それが伝えられているものを通じて人々が書いていることだから。)

(IV. 15—18)

このように、詩人は物語を書く覚悟を述べる。だがそのすぐあとで、次のように詩人はその覚悟が如何につらいかを洩らしてしまう。

Allas! that they sholde evere cause fynde

To speke hire harm, and if they on hire lye,

I wis, hemself sholde han the vilanyie.

(ああ、彼等が彼女に悪口を言う理由を見出すとは情ない。もし彼等が彼女に悪口を言うなら、まことに彼等自身恥ずべきことをしている)

と言うべきであろう。)

(IV. 19—21)

Chaucer は Book V においても Criseyde をかばっているのは変りない。それは詩人が実在人物をモデルに考えていたために、Criseyde を悪女にすることが心理的にむずかしかったからかもしれないのだ。

しかし Chaucer がいかに同情しようとも、詩人はもはや後ろに退くことはできないのである。即ち、その物語はそれ自身の世界をもっているものであり、それ自身の論理で動く筈だからである。そこに、詩人がたとえ単なる義務的な意識しか持ち合せていないとしてもこの物語を軽々しく終らせることが考えられただろうか。むしろこれは、詩人の心に重くのしかかり呻吟せしめたにちがいない。少くとも Book V に至って何度も、詩人が自由に手を加え、修正したといわれている⁽⁹⁾のが事実とすれば、そこにこそ、読者は詩人の気持になってその苦しみに敬意と理解を示すべきだと思うのである。

そしてここにこそ、Chaucer がアレゴリーから一步離れようとし、且つ又 courtly love から一步はみ出ようとする人間らしい戦いを純粋な芸術的良心をかけて戦っていたに違いないのである。ここでは Chaucer 個人の経験が顔をのぞかせるところかもしれない。この詩が何を意味するかを知るには、詩人個人の姿を見出すことは意味のないことではない。しかしそれだけでこの詩の悲劇構成の全てを考えることはむずかしい。ある批評家は、Chaucer が courtly love に対して個人的に否定的な考えをもっているといつて、それがこの物語の悲劇を語らせている大きな要素だと言うかもしれない。しかし私の考えによれば Chaucer はむしろ courtly love の convention (しきたり) に鋭い目をむけていると思うのである。それを以下に少し調べていこう。

〔Ⅳ〕 報いのない愛

Chaucer は *The House of Fame* の中で、鶯が詩人に慰めようとしてやって来たというくだりで、「長いこと熱心に Cupid 及び Venus に報いもなくつかえてきたからだ」(H.F. II. 615—619) という。これと Chaucer 自身が *Troilus* の中で言う言葉と合わせて考えよう。即ち、

For I, that God of Loves servantz serve,

Ne dar to Love, for myn unliklynesse,
Preyen for speed, al sholde I therfore sterve,
So fer am I from his help in derknesse.

(何となれば、私は愛の神の僕につかえるもの、まして結果として死ぬことになろうとも、成功を求むべく愛に祈ることなど私のすべきがらではありません。それほど私は暗闇の中で彼から遠くはなれていきます。)

(I. 15—18)

だから、たしかに、Chaucer 自身に報いのなかった経験があったことが肯定できるであろう。

しかしこれは、彼に特有な表現の仕方とは思えないような気がする。何故なら Chaucer と同時代の詩人 Gower の *Confessio Amantis* の物語について (私は直接それを読んだわけではないが) *The Cambridge History of English Literature* は、次のように言っている。

「その Love、即ち作者 (Gower) 自身は、愛に長くつかえていたが、報いがなく……」

それ故、これは courtly love の男女の関係から見ても容易に想像できるように、ある特定の詩人に固有な経験に関係があることではなく、courtly love の convention ではないかと思う。

Troilus において、Chaucer は *The House of Fame* におけるのと違って、ただ「報がない」という言い方を最早していない。しかし、次の所を見て、それを一そう深めていることを知るのである。即ち、

But in hire lettre made she swich festes
That wonder was, and swerth she loveth hym best;
Of which he fond but botmeles bihestes,
But Troilus, thow maist now, est or west,
Pipe in an ivy lef, if that the lest!
Thus goth the world, God shilde us fro meschaunce,
And every wight that meneth trouthe avaunce!

(しかし彼女の手紙の中で彼女は大へんに敬意を示した、そして彼を一番愛すると誓っている、それを彼はうつろな約束であると見た。しかし Troilus よ、お前は今は失恋して、よければあきらめるがいいぞ。世の中はこんなものだ。神よ、われらを試みより守り給え、そして心から真実なる者すべてを助け給え。)

(V. 205 st.)

そしてこれ以後は、「しかし Troilus よ、お前は失恋してあきらめるがよい。世の中はこんなものだ」というムードで支配されていく。何という悲しさであろう。詩人は自らこの悲劇の意味を語らずにはいられなくなったのである。

だが Troilus はまだ、あくまでも報われない love に固執することになる。

But fynaly, he ful ne trowen myghte
That she ne wolde hym holden that she hyght;
For with ful yvel wille list hym to leve,
That loveth wel, in swich cas, though hym greve.

(しかし、ついに彼は彼女が約束したことを守らないことを信じる
ことができなかった。というのはたとえ悲しむことになると、愛に完
全であるものは愛することをやめることをいやがるものなのだ。)

(V. 1635—8)

たとえ悲しくても、よく愛するものは愛することをやめることをいやが
るのだ、という開き直りは、もはや「愛には報いがない」という con-
ventional な言い方以上に、絶望と悲愴感とがある。即ち詩人は Troilus
がどう裏切られ、報いを得ず自滅につながろうとも、Criseyde 以上に
真実でありつづけることを止められないようにしむけているのだ。

Troilus が—そう憐れなのは、詩人自身が「しかし Troilus よ、お
前は失恋してあきらめるがよい、世の中はこんなものだ」といった時に、
Troilus はすでに詩人 Chaucer 自身にさえ見捨てられてしまっている
ことだ。ただ Chaucer はこの物語自体の論理で Troilus の二重の悲
しみを語ること (The double sorwe of Troilus to tellen) をつづけ
るのである。

[V] Double sorwe と double wo

さて、double sorwe という言葉は甚だ興味あるものである。これを
Chaucer は二回もくりかえしている (I. 1st, 8st.). Double sorwe の
考えは、Dante の詩の中にも示唆されているようであるが、しかし
Chaucer の独創でないにしても、Chaucer は自ら異常に深められた悲
劇に深い関心があったことを示している。そういう意味では、double

sorwe は詩人独自の考えだといえる。さらに Chaucer は彼自身の詩 *The Complaint of Mars* にすでに似たような表現 double wo (二重のなげき) を使っているのが目をひくのである。

Chaucer にとって、悲しみとか、歎きが、Fortune (運命の女神) に対する興味と一体不離となっているのではなかろうか。

Courtly love とは別に、Fortune が、気まぐれによって人間に悲しみや歎きをもたらすという哲学が、Chaucer 個人の中に人生経験を通じて深められて存在していたのであろう。Boethius の哲学がここで大変重要な位置を占めてくるゆえんである。

先程、“double wo” を引用した *The Complaint of Mars* は John of Gaunt に関係があるという説を G. Williams は主張している。彼によると、この詩は Gaunt-Katharine の love-affair をのべていることが明らかであるという⁽¹⁰⁾。そのヒントを得てもう一度この詩を読むと、*Troilus* と似ているところ、乃至平行しているところがあるのに気がつく。即ち、「彼がそれ(テーベのブローチ)をもっている間、ずっと彼は大へんな苦しみに堪えなければならず、彼は気が狂ってしまいそうになる。彼がそれを手放すときに、そんなにすばらしい宝を手ばなしたことで二重の歎きと苦しみをもらった。しかし結局このブローチはこの狂気の原因ではなかった。それを作ったものは、それを豊かにしたので、それをもつものは皆悲しみをもつ管であった。だから罪はそれを作ったものとそれを欲しがったものにあった。それはすべての恋人にも私にもあてはまる」。(The Complaint of Mars 251—63)

これは *Troilus* が Criseyde を愛しはじめて苦しみ、苦しみが喜びに変わったが *Troilus* が Criseyde を失う時に再び苦しんだという *Troilus* の筋書きと平行しているではないか。その二重の苦しみを *Troilus* の為に歎くのが詩人の目的であるから、上に引用した箇所は見逃せない。それ故この部分をもう少し詳しく見てみることにする。そこに *Troilus* の悲劇構成を説明する鍵が見出されるかもしれない。

Chaucer はテーベのブローチ (F.N. Robinson の註によると、これは腕輪のことで、それをもつもの、それを欲しがるものには呪いがかかったとのことである) を用いて二重の歎きの意味を説明している。これには一種の呪力があるらしいが、詩人はそれが狂気の原因ではなく、それを作ったものはそれを豊かにしたので、それを持つものは皆悲しみを

もつ筈だった。即ち美しいものを持つものは苦しむということであり、罪はそれを作ったものと、それを欲しがるものにあると言う。こういう議論は結局どこへ行くのであろうか。

上にあげたアレゴリーの説明に「それはすべての恋人にも私にもあてはまる」(263) といってブローチを *my lady* (264) といい、「彼女が私の逆境をひきおこしたのではなく、彼女を創った神、私が欲しがり、私自らの死を得ようとしたほど彼女の顔に美しいものを与えた神、私は死ぬので、私は彼をうらむ」(266—270) と書いてあるところから分かるように「ブローチを作ったもの」は「神」のことを意味していて、「私は彼をうらむ」というのは「私は神をうらむ」という意味になる。そして「神をうらむ」ということは矛盾以外の何物でもない。

この矛盾は、永遠の問い「神は彼の下にある *love* とか *companye* (=companionship つまり友情) とかを高くされたのは何の目的であったのか、そしてそれらをものともせず人々を愛させるのは何の目的の爲であったのか」(218—220) に結びついているのである。この矛盾を、この問いにつなげて解きほぐして見ればこうなる。即ち、神はこの世に美しいものを与えた。それは善いことである。それを人はほしがる性質をもっている。それは善いことである。だが、この善いことだらけの中からどうして苦しみがでてくるのであろうか。(もしその苦しみが悪いことから来るならよくわかる。だがそうだとしたら、神の創造も人がそれをほしがることともわるいことになる。)

〔Ⅵ〕 悲劇構成

(a) 永遠の問いと高貴さ

しかし Chaucer 自身はこのような答のない問いに振りまわされて現実の世の中を見失うような詩人ではない。彼は現実主義者である。だから「この世はこういうものだ」というのが実際問題としての彼の態度である。なぜなら人が苦しむことは、善悪にかかわらず存在するのだから。しかし彼はこれが悲劇の本質と実態であることを鋭く見て取る。即ち、もし神の創造が善かつ罪なく、美しいものを求める心が善かつ罪ないならば、そこで苦しむ現実の人間を誰が慰め得るだろうか。その苦しみに

は反響がないということになるのだ。

「愛に報いがない」ということを再び考えてみる。愛というのは、courtly love のルールに則った奉仕 (service) である。そして報いが無いというのは、この奉仕の誠実な実践に対して反応がないということであり、正しい者の正しい行ない、又は善いものの善い行ないに報いが無いということであり、それは誠実なものが一そう苦しむということによって、一そう報いが無いということになるのである。これは Boethius の問いを思いおこさせる。

Troilus は問う。

“Fortune, allas the while! What have I don? What have I the agylt?”

(Fortune よ、ああ、私は何をしたというのですか、私はあなたにどんな罪を犯しましたか。) (IV. 260—1)

これは正しいものの問いである。Boethius の問いも同じ調子である。即ち、「もし神がいますならどこから悪いことが来るのだろうか。そして神がもしいい給わなかったらどこから善いことが来るのだろうか」。

(Boece I, prosa 4. 155)

Boethius (c. 475—525) はローマ人であり執政官であったが、皇帝に対する叛逆罪で獄に投ぜられ、死刑になった。その獄中に書いたものが *De Consolatione Philosophiae* (哲学の慰め) というアレゴリーで、それは Alfred 大王をはじめ、Chaucer, Elizabeth I その他の人々に翻訳されて読まれた。ヨーロッパで最も広く読まれたものの一つである。Boethius は無実の罪を被せられて、瞑想の中に苦しむことの意味を考え、人生、神学、倫理について深く考えた人である。彼の「正しい人がなぜ苦しむのか」という問いが中世において広く人々の注意をひき、人生観を深めたであろうことは非常に興味あることである。

「正しい人が何故苦しむか」という問いに対する答えの中に次のような言葉が見つかるだろう。即ち、「彼 (神) は或る人々を試練によって苦しむことを許し給う、何故ならば試練は忍耐の行使と実践によって意志の力を強固にする筈だからである」(Boece IV. 267—271)。言いかえれば、神は、神の試みに値する者ほど、一そう苦しむことを許す、というのに等しい。これは自然にアリストテレスの悲劇観を思いおこさせるのである。即ち「(悲劇) 人物は、地位と能力がなければならない。即

ち、彼はたしかに地位にしろ、心にしろ、感じとる能力にせよ、一般より抜きんでていなければならない。又悲劇の人物は落ちるべき高い位置にいないなければならない。彼の位置が高ければ高いほど、その没落は一そうみじめなものである」⁽¹¹⁾。

こういう悲劇観から見ると、Troilus は悲劇の drama にふさわしい。即ち、彼は Troy の Priam 王の王子であり、騎士の鑑といわれ、高潔な人物であり、(courtly love に従いつつ) 苦しめば苦しむ程、高貴さを増すのであり、それは Boethius の哲学にもあてはまる。そしてカタルシスの効果により、読者の感情をも高め、調和のうちに落ちつかせることになるのである。

(b) Criseyde の立場

さて「愛には報いがない」という courtly love convention によって Troilus が悲劇の主人公であるという、私の考え方を先に述べたが、これは勿論男の立場であって女の立場ではない。Criseyde には悲劇が成立しないのだろうか。この問いに対する Chaucer の答は勿論否定的であるに違いない。何故ならこの詩は Troilus の悲しみを悲しむことを目的としているからである。では詩人は Criseyde を同情に価しない女、乃至悪女に作っているのを見捨てているのだろうか。この点を調べて、詩人が悲劇に対してとった態度を更に検討して見たい。

はじめに Criseyde は美しい理想的な貴族の女性として描かれている。それは実に美しい。

Criseyde was this lady name al right.
As to my doom, in al Troies cite
Nas non so fair, for passynge every wight
So aungelik was hir natif beaute,
That lik a thing inmortal semed she,
As doth an hevenyssh perfit creature,
That down were sent in scornynge of nature.

(クリセイダというのがこの婦人の名前だった。残念であるがトロイ
広しといえど、これほど美しい人はいなかった。というのは彼女の美
しさは非常に並外れて天使のようで、彼女は地上の自然を怖れさせる
為に送られてきた死を越えた存在のようで、神々しく非の打ちどころ

のない人間のように思われたのである。) (I. 99—105)

Troilus も Criseyde も理想的な貴族の男女であって、男が受ける不運を女も別な面から受けているので、男の悲劇は同時に女の悲劇であって、もよい。即ち Criseyde はその高貴さからみて Troilus と同じような悲劇的人物となる可能性をもっているのである。にも拘らず、やはり Criseyde には悲劇という建前が適用されない。そして Criseyde は不実な女という建前が詩人によって適用されているのである。

しかし詩人は言う。

Ne me ne list this sely womman chyde

Forther than the storye wol devyse.

(私はこの不幸な女性を歴史が責める以上に責めたくはないのです。)

(V. 1093—4)

明らかに詩人は Criseyde を責めるのを storye (=history 歴史) に任せ、自分は責めようとしな。そして彼は更に、彼女をゆるす方にまわって次のように言う。

For she so sory was for hire untrouthe,

I wis, I wolde excuse hire yet for routhe.

(彼女が自分の不誠実さをとても申し訳なく思っているので、なおあわれむ故に、私は彼女を許してやりたいのだ。)(V. 1098—9)

どうみても Criseyde は憎むべき女になっていない。事実 Criseyde の人格が変わったとか、墮落したとかの決定的な描写を見出せない⁽¹²⁾。急に憎むべき存在になりよう筈がない。詩人は止むなく、歴史が伝える Criseyde に対する悪い評価に一步譲ろうとしている。つまり Criseyde を不実な悪女に仕立てようとしているのだ。果して詩人の心は分裂しているのか。

しかし詩人は Criseyde に人間的な弱さを見、同情しつつも、もっと深い面を見て男と女の差を鋭く見ていたのである。即ち、詩人から見れば courtly love において男は徹底的に絶対的自己否定の可能性を持つが、女にはその可能性がないと映っているのだ。私は禁欲主義のことをいっているのではない。外面的な意味ではなく—そう内面的に自己否定を意味する。女の側に苦勞がないというわけではない。しかし絶対的自己否定に徹する男に比べるならば、女の側にどんな悲しみがあろうと、氣苦勞があろうと、それは「報いを得ている」ということができ、男の

「報いが無い」という現実と比べれば、大きなへだたりがある。この点を理解する為に、敢えて、キリストのマタイ福音書 6:1—18 における言葉と態度を引用したい。キリストは真の自己否定と偽善とを区別して「よくよく言うておくが、彼等（偽善者）はその報いを受けてしまっている」ときびしく言う。これと同じことが建前として Chaucer の心にあったのではなかろうか。この建前が悲劇構成に関係しているように思える。したがって詩人の心にはこの悲劇を単なる Fortune の気まぐれから結果するもの以上に、むしろはるかに次元の高いものへと意図したように考えられる。

(c) Love のあいまいさ

Troilus のモラルの高さは、詩人の心にはすでにキリスト教のそれと二重映しになっていたのではあるまいか。詩人は、この物語の中でキリスト教を用いなかったが courtly love を猶且、人間の本质を問い、その問いに対する答を得る手段として用いていた。即ち、キリスト教の love は上からの恵みとして人の心にひきおこされ与えられるのであるが、それに対して courtly love は、その起源は罪深いものであり乍ら、それにも拘らず、否それだからこそ一層、赤裸々な人間の嘘のない本性にその根拠をもちつつ上へ指向する love であり、その試練を経て、神の属性をはるかに仰ぎ見る渴望を代表していると言えよう。そこには喜びがあるが常に悲しみと苦しみが伴う。それはしかし、永続する喜びを求めつつも（求めても手に入らないという理由で）憩うことができないというところまでぎりぎりに自己否定を徹底させる時、キリスト教の love と courtly love がかすかに触れ合うとでも言うべきかもしれない。

Gordon は次のように説明する。

「P. M. Kean はその (Troilus の) 詩について書いている、『そのテーマは愛であり、それは、本源にもどりたいという人間の魂の^{きよ}聖く植えつけられた性向のほんの一部であるが、それは地上の愛において、部分的な満足を見出す性向でもある。そしてそれは、ある遺伝的に善なるものの一部であるから、魂の最終的善を結果するべきであり、その魂は〈それ自らを決して忘れたことのない〉もので、それは重要な昔の記憶を保っているのである』。しかしもしその愛が、本当の方向

を見失ったなら、この詩に教えているところの中世の愛の哲学について、これは真実かもしれぬが同時に又その哲学に従えば地上に見出される〈部分的な満足〉は単なる幻想の幸福にすぎない。(そして真に善なるものの発見ではない。)すべての love は〈善なるものへ向う意志〉であるが、*Troilus* で問題となるのは lovers の〈意志〉が盲目であったか、彼等が求めている善が本当の善であったかどうかということである。もしそれが問題とならなければ彼等の love は中世の理論用語の *cupiditas* (情欲) でなければならない。しかしその使い方にあいまいさを許すのは 'love' という言葉が単に *caritas* (敬愛) にも *cupiditas* にも用いられうるという事実があるからではない。それだけでなく、中世の love の哲学そのものの中に伝わっているパラドックスがそうさせるのだ。それによってすべての love は魂の神与の生来的衝動であるから、それが本来とるべき目的(それが求めている〈善〉)からそれて、偽りの善を愛するようになって、それ自身の性質からいって善なのである⁽¹²⁾。」

たしかにこのあいまいさがこの詩に存在して読者を驚かすのであるが *courtly love* がキリスト教のパロディーになっているし、*Troilus* がキリスト教徒のようにになっているのは *Gordon* の指摘の通りである。詩人がこのあいまいさをどういう意図で用いたかは議論の余地がある。*Gordon* の議論によれば、詩人が *Boethius* の哲学によって真の幸福と偽りの幸福という基準を考えつつアイロニーを意図したといっている⁽¹³⁾。しかし彼自身も認めるように *Troilus* 自身がどの程度そのアイロニーを体現しているかは別な問題である⁽¹⁴⁾。何故なら、*Troilus* 自身が単純な理想主義者故にこのアイロニーの体現者となりうるにも拘らず、詩人が彼を死後直ちに第八天に引き上げていることによって、そのアイロニーを不完全にしてしまっているからである。

〔Ⅶ〕 悲劇の結び

Troilus は一人で *Criseyde* の不実をうらむ。しかし彼はそれでも束の間といえども *Criseyde* を愛することを止められないという。

Thorough which I se that clene out of youre mynde
Ye han me cast; and I ne kan nor may,
For al this world, withinne myn herte fynde

To unloven yow a quarter of a day!
In corsed tyme I born was, weilaway,
That yow, that doon me al this wo endure,
Yet love I best of any creature!

(こういうことで私は貴女が私をすっかり貴女の心から拭い去ってしまったことがわかります。しかしなお、どうしても、ちょっとの間も、私は貴女を愛さずにはいられません。ああ私の生れた時に呪いあれ、私は貴女がこんなに歎きを与えても、貴女を世界中で一番深く愛するのです。)(V. 1695—1701)

そして神に正しい者の「永遠の問い」を投げかける。

“O God” quod he, “that oughtest taken heede

To fortheren trouthe, and wronges to punyce,
Whi nyltow don a vengeaunce of this vice?

(「ああ神様」と彼は言った、「あなたは信実を助け、悪を罰するよう
に注意なさるべきですのに、何故この罪に復しゅうして下さらないの
ですか。」)(V. 1706—8)

ここに詩人は Troilus の一方的な愛、すでにキリストの愛に近い愛を示していることがわかる。そしてその愛が報われていないことと、そういうことがこの世の中で許されていることへの訴えとを詩人が示しているのである。この悲劇はここで最高潮に達する。

Criseydeを憎んでいるのは Troilus ではなくして Pandarus であるというの是一种の対照であろうし、歴史的評価を Pandarus に代弁させているとも言える。そして Chaucer は又, swich is this world (この世はこういうものだ)(V. 1748) と溜息を洩らす。この言葉は Chaucer の動かせない態度であり、すべての感動をこの短い言葉で言い尽くしているようである。

V. 1807 から急に物語が飛躍してくる。即ち Troilus の霊が第八天に昇るのである。Troilus の絶対的自己否定と、一方的愛に悲劇を描きつけた詩人は、自然に Troilus に宗教的雰囲気を与えてしまったことは先に述べた通りである。そして Troilus はいわば courtly love の saint (聖者) である。だから Troilus の昇天は、理屈抜きに素直に受けとりたい。詩人が独自にこういう考えを発明したとは思いにくい。聖書の中の昇天記事が関係あるだろうし、G. Williams の言うように

Dante の *Paradiso* が影響を与えたかもしれない。とにかく *Troilus* の昇天はキリスト教のイメージとだぶっていることは否定できない。

〔VIII〕 若者への警告と教訓

Chaucer は、この詩の終りにおいてあいまいさを捨てて完全にキリスト教を前面に出すことになる。これは明らかに courtly love への訣別以外の何物でもない。何故このような矛盾を犯さなければならなかったのか。詩人としても何故このような一貫性を欠く結論をこの詩に与えたのかは決して小さな問題ではなかった筈である。それ故に何か表面上の矛盾の陰に別な一貫性が見出されるかもしれない。このことを調べる為に Epilogue における Chaucer の *Troilus* と Boccaccio の *Il Filostrato* との比較をしたい。何故なら Chaucer は *Il Filostrato* にもとづいて *Troilus* を書いたといわれているからである。

Il Filostrato の Canto 8 において Boccaccio は若い男達に呼びかけ、警告して言うには、女たちは移り気で、彼女たちの多くは祖先を誇り、うぬぼれが強く軽蔑的であると。そして理想の女性とは、避けるべきこと、求めるべきことを見分け、約束を守る女性であると、理想的女性論をつけ加える。そして詩人は読者に Troilo を憐むことを乞い、且つ読者に愛の神へ、Troilo が住む地で平和をもてるように祈ってくれと乞う⁽¹⁵⁾。ここで注意すべきことは Boccaccio は男だけに呼びかけていること、悪女論をかき、理想的女性論をかいていること、Troilo に対する憐みを乞うていること等である。

ところが Chaucer の *Troilus* においては詩人は男女に呼びかける。これは詩人が Criseyde を悪女と考えていないからであろう。したがって、悪女論も理想的女性論も書くことができない。そして詩人は Troilus を憐むことを読者に乞うことをしていない。これはすでに、Troilus が、地上で彼を悲しみ哀れんでいる人々に対して心で笑っているから当然である。このように Chaucer と Boccaccio とでは結びが大きく違うことは注目すべきことである。しかし Chaucer は若者に警告を与えようとして呼びかけをする形をとっているのは Boccaccio と同じなのである。では Chaucer は若者たちに何を警告しているのか。

Chaucer は悪女論を全くせず、worldly vanyte (地上的な虚栄) を

いましめ攻撃のほこ先を “coursed old rites” (呪わるべき courtly love) に向けている⁽¹⁶⁾ (V.1849)。そして叫ぶ。

Lo here, what alle hire goddes may availle. (V. 1850)

即ち、神々が Troilus に「報い」を与えなかったことを詩人は責めているのである。これが若者たちへの警告である。これが courtly love の存在そのものの否定である為に、Chaucer 独自のものであり、Chaucer の発明であるかのように一般に論じられているようである。そして確かにこの部分が *Troilus* と *Il Filostrato* と最もくいちがっていて、最も物語そのものから飛躍しているところである。しかしこれは決して Chaucer の独創ではない。これは *Il Filostrato* の悪女論に相当するところである。だからこの若者への呼びかけにつづくところ (V. 1835ff) を不可解としたり、不必要と見たりすることは全くあたらないのである。Boccaccio は悪女論のあとに理想的女性論を展開している。それが若者への教訓である。これも悲劇をさける為の教訓である。Chaucer もいわば理想的宗教論を書いている。それがキリスト教論であるのは勿論である。詩人が完全に宗教的になったのはこのように一貫した態度があったからで、それが読者を驚かせ怪しませるのであるが、Chaucer 自身の内的な問題としても、又 *Il Filostrato* に倣った形式の問題としても、この物語そのものから切りはなせないのである。

Chaucer は Boccaccio の詩に倣って悲劇を書きはじめたが Criseyde に実在のモデルがいたらしいこと、その為に Criseyde を悪女に描けずに、理想的な女性に描いたこと、それでも建前は悪女のつもりで、本音は違っていたこと、それ故 Epilogue において Boccaccio の悪女論、理想的女性論による若者への警告に相当するところを courtly love 有罪論、理想的宗教（キリスト教）論をもって若者への警告とせざるを得ず、全く宗教的な結論になってしまったということになる。

〔Ⅹ〕 結び

Chaucer が Troilus の悲劇を通して訴えることは、憂き事の多い現実の世界の姿であり、その中に一人の理想主義者が永遠の問いを問わざるを得ない不幸を負っていることであった。そして Chaucer 自身はこの詩を Troilus の二重の悲しみを語る為に書くと言っているように、

一理想主義者の悲しみをそのまま、「世の中はこういうものだ」との感慨をこめて悲しみつくすことに一番関心があったと言えよう。そして詩人はバランスのとれた現実主義者でありながら、その深く広く柔軟な洞察力の故に理想主義者の悲しみを徹底的に深めて悲しんでみることに芸術を賭けたのだと思う。

この悲劇構成の中で、大きな要素でありながらしかも見逃されやすい一つの面がある。そしてそれはこの悲劇そのものを性格づけているものである。それは何か。秘密故の悲劇ということである。即ち Troilus の二重の悲しみは、すべて秘密を第一条件とする courtly love の閉鎖性の故におこるのである。勿論、読者には詩人がすべてを語り、当事者に隠されている事をも明らかにしている。だから読者はこの物語の秘密だという前提を忘れやすい。だがこの前提が詩人の頭にある為にこの詩が極度に心理描写を濃密にし、この閉鎖的な前提が理想主義者 Troilus を一そう宗教的な自己否定に近づけていくことになる。このことがこの悲劇をいわば閉ざされた悲劇ともいふべきものにしているのではないだろうか。

〔注〕

- (1) Coghill: *Geoffrey Chaucer* (Writers and Their Work; No. 79), p. 58.
- (2) Coghill, *ibid.*, p. 27-8.
- (3) John Jay Parry (ed.): *The Art of Courtly Love* by Andreas Capellanus, 1941, 1959, p. 3-4.
- (4) J.J. Parry, *ibid.*, p. 6, 7.
- (5) George Williams: *A new view of Chaucer*, 1965, 1966, p. 52, 3.
- (6) G. Williams, *ibid.*, p. 10.
- (7) G. Williams, *ibid.*, p. 176.
- (8) G.G. Coulton: *Medieval Panorama*, p. 249.
- (9) G. Williams, *op. cit.*, p. 194.
- (10) G. Williams *op. cit.*, p. 58-9.
- (11) Walter Jackson Bate (ed.): *Criticism: the Major Texts*, 1952, p. 16-17.
- (12) *The Double Sorrow of Troilus* by Ida L. Gordon, 1970. p. 21-2.
- (13) I.L. Gordon, *ibid.*, p. 36.
- (14) *ibid.*, p. 39.
- (15) French: *Chaucer Handbook* (1927, 1947, 1955), p. 178.
- (16) Karl Young は *The Origin and Development of the Story of*

Troilus and Criseyde, 1908, 1968, p. 120 において Guido と Benoit の影響を認めている。

BIBLIOGRAPHY

- Robinson, F.N. (ed.): *The Works of Geoffrey Chaucer*, Second Ed. (1957).
Houghton Mifflin Company, Boston.
The Cambridge History of English Literature,
Vol. II (1912)
- French, R.D.: *A Chaucer Handbook*, Second Ed. (1927, 1955).
Appleton-Century-Crofts, Meredith Corporation Ltd., N.Y.
- Bate, W.J. (ed.): *Criticism: the Major Texts* (1952).
Harcourt, Brace and Company, New York.
- Coghill, Nevill: *Geoffrey Chaucer* (Writers and Their Work, No. 79) (1956, 1969).
Longmans, Green & Co.
- Parry, J.J. (ed.): *The Art of Courtly Love* by Andreas Capellanus, (1941, 1959).
Frederick Ungar Publishing Co., N.Y.
- Williams, G.: *A new view of Chaucer* (1965, 1966).
Duke Univ. Press, Durham, North Carolina.
- Coulton, G.G.: *Medieval Panorama* (1958).
Meridian Books, N.Y.
- Gordon, I.L.: *The Double Sorrow of Troilus* (1970),
Oxford Univ. Press.
- Young, K.: *The Origin and Development of the Story of Troilus and Criseyde* (1908, 1968),
Gordian Press, N.Y.
- Kittredge, G.L.: *Chaucer and His Poetry* (1915, 1970).
Harvard U. Press.